

オンライン授業を受講した中級日本語学習者の意味づけと対処行動

—KJ 法による分析—

稲田 栄一・吉田 真宏(立命館アジア太平洋大学)

1. はじめに

新型コロナウイルス(COVID-19)の感染症拡大に伴い、日本国内の多くの大学・高等専門学校等においてオンライン学習型の授業が行われるようになった。発表者が勤務する立命館アジア太平洋大学(以下、APU)の日本語科目においても、2020年度春学期より、Web 会議システム Zoom を用いた同時双方向型のオンライン授業が導入されることとなった。従来とは異なる環境の中、試行錯誤を繰り返しながらコース運営に努めた結果、オンライン授業ならではの学びや発見が教員・学習者それぞれの視点で得られたのではないかと考える。これを今後の教育活動に活かすためには、獲得したリソースやオンラインコースを運用する上での留意点を整理する必要がある。そうすることで、より質の高いオンライン授業を提供することが可能になるだけでなく、事態が収束し再び対面型の授業形態に立ち返るときが来たとしても、オンライン授業により得られたノウハウを必要に応じて活用できるようになるのである。そこで、本発表はオンラインコースを受講した日本語学習者が捉えたオンライン授業に関する意味づけとその対処行動を KJ 法(川喜田, 1986)¹により明らかにする。

2. 調査の概要

本研究の調査対象者は、2020年春学期に発表者が担当した APU の中級日本語コースの受講生(3クラス、49名、16の国・地域)である。対象者は、過去に履修した日本語コースで対面型授業を経験し、COVID-19の感染が拡大した2020年春学期の中級コースにおいて Zoom を用いた同時双方向型オンライン授業を受講した外国人留学生である。なお、対象者の殆どがコース開始時の段階では互いをよく知る間柄ではない。対象者には、学期末の振り返りレポートとして自由記述形式の作文を書いてもらい、Learning Management System の manaba を用いて提出してもらった。このレポートは全て日本語で書かれたものであり、「オンライン学習を通じて感じたこと」、「オンライン学習の良かった点・悪かった点」、「学び」、「自身の日本語能力の変化」、「遭遇した困難」、「生活の変化」など、受講生自身が経験した出来事を具体的に書くように指示した。本発表における分析対象は48名の提出者の中から同意が得られた34名の受講生の記述である。なお、この文字データは一人あたり686文字(最大899文字、最小581文字)で書かれたものである。データ分析にあたり、質的データ分析法である KJ 法を援用した。KJ 法は情報量が膨大で混沌としている場合においても、図解化により情報をコンパクト化し、結果をまとめやすくなるという利点がある。本発表では、受講生のオンライン授業に対する考えや対処行動を幅広く拾いあげオンライン授業の特徴をより広く理解するために KJ 法を採用した。

3. 結果

受講生の振り返りレポートを KJ 法により分析した結果、表1のような特徴が明らかになった。

表1. オンライン授業に関する学習者の意識と対処行動

受講生のイメージ	要因	対処行動
<プラスイメージ> オンライン授業は良いものだ ／便利だ／リラックスできる ／学びの価値が高まる等	学習面での利点がある(学習内容・学習時間を管理できるようになった等)／授業内での利点(世界中の友達とやり取りできる楽しさを知った等)／生活面での利点(通学・早起きをしなくても、自由な時間が増えた)	教師に頼らず学習内容を考える／自主学習の時間を長くする／授業外に友人とオンラインで日本語を学習、日本語でチャットをする等
<マイナスイメージ> オンライン授業は大変だ ／不便だ／わかりにくい／ストレスがたまる等	授業内での困難(対面式とは異なる授業やグループ活動、教師に質問しにくい等)／日本語学習における困難(会話・漢字・読解能力等の低下等)／物理的な困難(インターネット・PC 不良等)、体調不良／交友関係・日本語使用場面の喪失(新しい友達が作れない、日本人と交流できない等)	インターネット環境を改善した／SNS を利用してグループワークをした／日本のテレビ番組やアニメを見て、日本語を勉強した／授業外に、教師・友人にメールで相談した／オンラインのイベントに参加した等

4. まとめ、今後の課題

本調査の結果、授業内でのやり取りだけでは窺い知ることができなかった、受講生のオンライン授業に対するイメージの形成とその要因、その後の行動を可視化することができた。授業のオンライン化の利点として、自身の学習を管理できるようになったことを挙げる受講生が多く見られた。この結果は、コロナ禍や授業のオンライン化という避けては通れなかった環境変化が受講生の学習者オートノミーを促進している可能性を示している。一方、受講生が抱えていた困難は多岐にわたり、日本語の授業・学習における困難だけでなく、コミュニケーションの機会を喪失したことによりモチベーションを下げたという振り返りも多くあった。しかし、対人関係が希薄化し、大学生としての満足感が得られなくなる中で、受講生たち各々のやり方(SNS や ZOOM)で他者とコミュニケーションをとろうという姿勢が見られた。また、オンライン授業面における振り返りでは、会話・漢字・読解能力等が低下したという意見が目立ち、学習環境整備の必要性が明らかになった。今後、授業内容を改善していくことはもちろんのことだが、受講生の自律学習を後押しするための方法を議論していくことが重要である。加えて、オンライン授業を経験した日本語学習者が直面した個別の事例や、自主学習を行うに至ったプロセス、学習意欲と困難、オンライン授業の利用状況と問題点などの詳細を理解するための調査が必要である。

¹ 川喜田二郎(1986)『KJ 法—混沌をして語らしめる』中央公論社